

あくむぐ
悪い夢喰らい、
夢枕 獏



あくむぐ
悪夢喰らい

ゆめまくらばく
夢枕 獏



角川文庫 6113

昭和六十年十月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)二三八―八四五―

営業部(〇三)二三八―八五二―

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

悪夢喰らい

夢枕獏



角川文庫 6113

目次

鬼走りきげし

ことろの首

中有洞ちゅうどう

のけもの道みち

骨董屋こつどうや

四畳半漂流記よじようはんひようりゅうき

八千六百五十三円の女

霧幻彷徨記むげんほうこうき

深山幻想譚しんざんげんそうたん

解説

大原まり子

五

三元

七九

二三

四五

八三

三五

四七

二七

二九

鬼^き
走^{ばし}
り

いつもの場所で、老人の後ろ姿が目に入った。

まだ薄い闇の残るアスファルトの上を、老人の細長い脚が、やや大きめのストライドでひたひたと刻んでいる。

老人は、今朝も赤いジョギングパンツをはいていた。上半身には紺のランニングシャツを着、額に白い鉢巻きを巻いている。

禿げあがった頭部にほとんど毛はなく、両耳のまわりに、わずかに白髪がからんでいる。落ち着いたペースであった。

十月初めの早朝――。

陽が昇るには、まだいくらか時間がある。

キンモクセイの香りが、薄く大気に溶けている。

佐々木竜夫は、わずかにピッチをあげた。

ゆつくりと老人の姿が近づいてくる。

佐々木と老人の他に、道路に人影はない。

時おり、新聞配達と牛乳配達のスクリーターに会うだけである。

佐々木は、軽い足どりで老人をぬいた。

「お先——」

ぬく時に低く声をかける。

老人は答えない。

いつものことであつた。

老人は、顎を小刻みにふりながら、無表情な顔で前方を睨^{にら}んでいる。学者か何かのように、いかめしい顔をしていた。

半開きの唇からもれる荒い喘^{あえ}ぎ声が、横をぬいてゆく佐々木の耳にとどいてくる。無表情な顔とは別に、いかにも苦しそうな喘ぎ声であつたが、それが老人の癖らしかった。

最初から終りまで、いまにも泣き出しそうな顔のまま、フルマラソンを走りきる選手もいるのだ。

老人をぬき、八〇〇メートルほど走ってから、佐々木は道を左に折れた。

左側が病院、右側が屋敷街の、塀に左右を囲まれたアスファルトの道である。この道を走りぬけ、一キロほど先の公園までが、いつもの佐々木のジョギングコースである。公園で約三十分の柔軟体操をし、同じ道をもどる。片道で五キロ、往復で一〇キロ。これを走りきるのが、雨の日以外は欠かしたことの無い佐々木の日課だった。休日には、三倍の三〇キロを走る。

佐々木は三十五歳であつた。

年に何度か、あちこちで開かれるマラソン大会に出場する。四二・一九五キロのフルマラソンである。成績はともかく、これまでその全てを完走していることが、佐々木の自慢だった。

二十八歳で結婚をし、急に増え出した体重を落とすためにジョギングを始め、それが病みつきになった。

佐々木が、背後にあしおとを聴いたのは、病院を通り過ぎたあたりであった。ぴたぴたという小さなあしおとが、すぐ自分の後方からついてくるのである。

佐々木は始め、老人が自分に追いついてきたのかと思った。これまでになかったことである。

——まさか。

佐々木は、すぐにその考えを打ち消した。

老人が、あの道から左へ折れるこのコースを利用しているらしいことはわかっているが、老人にしてはあしおとのピッチが早すぎた。

軽く、佐々木は速度をあげた。

あしおとの主は、ぴったりとついてきた。

ほんの二メートルほど後方である。

「もっともっと——」

ふいに、佐々木の頭に声が響いた。

はずんだ子供の声であつた。

耳に直接響いてきたものではなかつた。

気のせいだとしてすませることができるよう微かな声であつたが、その声には生々しいまでの息使いがこもっていた。

佐々木は、走りながら後方に目をやった。

パジャマを着た六歳くらいの子供が、笑みを浮かべて佐々木を見ていた。素足であつた。

子供は、その素足でアスファルトの上を走っているのだつた。

“もっと早く”

子供の赤い唇が、にっと左右に吊りあがり、またあの声が頭に響いた。

佐々木は前に向きなおり、つられたように速度をあげていた。

素足がアスファルトを打つ音が、それに少しも遅れずについてくる。

“もつともつと”

嬉々とした声が響く。

佐々木はさらにスピードをあげた。

もはや長距離のスピードではなくなっていた。一五〇〇メートルを走る、中距離並みの速度である。それも、練習用のものではなく完全に試合用の速度である。

だが、小さなあしおとは、少しの遅れも見せなかつた。

“もつとだよ、もつと”

“走るんだ”

“走るんだ”

はずんだ声が響く。

そして、小さなあしおと。

子供についてこれる速度ではなかった。

恐怖が薄いセロファンのように佐々木の首筋に張りついていた。

それを払い落とすように、佐々木は首をふり、背後をふり返った。

佐々木の背後から走ってくるものは、子供ではなくなっていた。身体が大きさがそのまま、顔が、二十歳過ぎの青年のそれにかわっていた。

青年は、その顔に満面の笑みを浮かべていた。笑みのかたちには割れた肉色の口の中で、赤い舌が、生き物のようにひらひらと踊っていた。

佐々木の倍のピッチで動く小さな手足も、ブルーのストライプの入ったパジャマも、何かの冗談のようにさえ思えた。

自分でも気がつかないうちに、さらに速度があがっていた。

額にねばい汗が浮いていた。

もはや、全力疾走であった。

髪が、額に張りついている。

自分の手足ではないようであった。

もつと。

もつと。

声と言う。

こめかみで、心臓が鳴っている。

肺が痛かった。

肉体の動きに、肺がついていけないのだ。

その痛みから逃れるように、佐々木は走った。

2

老人は、ゆっくりとしたペースで、踏切りを渡っていった。

左右を確認するまでもなかった。

朝の早いこの時間では、一時間に数本も電車は走ってない。私鉄の踏切りだった。昼間は、上がっている時よりも下りている時の方が多いくらいのこの遮断機も、この時間帯ではほとんど上がったままである。

五〇メートルほど走って、右へ曲がる。

その通りに人通りはなかった。

無人のアスファルト道路が、トンネルのように続いている。

ジョギングシューズの靴底が、ひんやりしたアスファルトを確実に踏んでゆく。

いつもならば、やがて、後方からひとりの男が走ってきて、自分を追いぬいていくはずであつた。

サラリーマン風の男であつた。

いつも、男は、老人を追いぬいていく時に声をかけてゆく。

速くはなかったが、なかなか板についた走り方をする男だつた。単に健康のために走っている自分とは違い、はっきりした目的を持って走っているようであつた。

フルマラソンに出場しても、きちんと完走できるだけの実力はあるだろう。人と競うことよりも、少しずつでも自分の最高タイムをあげてゆこうという、そんなタイプに見えた。

企業の中で、どんな部署にまわされても、そこそこにはやっていけそうな男だつた。

佐々木竜夫という、その男の名前を、今は老人は知っている。都内にある中堅企業の課長であつたことまでわかっている。

四日前の新聞で目にしたのである。

それは、佐々木竜夫の死亡記事であつた。

死んだのは、老人が、最後に佐々木を見た日のことだつた。朝の八時頃、ここから四〇キロも離れた街で、死んだのである。ふらふらと走ってきた佐々木が、いきなり道路の真ん中で倒れたのだという。

多くの通行人が、その現場を見ている。

目撃者は他にもいた。佐々木が四〇キロ離れた街まで走ってゆく間に、何人かの人間が佐々木を見ている。佐々木は、青い、血の気の失せた顔で、時おり後方をふり返りながら走っていたという。

死因は心臓麻痺——新聞にはそうあった。

身元がわからないまま、佐々木の屍体は病院に収容され、昼近く、ジョギングに出かけたまま帰ってこない佐々木の家族から警察に連絡が入り、やっと身元がわかったのだという。

不思議なことであつた。

家族の者にも、佐々木が何故そんなに遠くまで走ったのか見当がつかなかった。

勤め先の会社も、休みの日ではない。朝、得意先の営業担当者とは会う約束もあった。

突然に、佐々木の精神のどこかがずれてしまったと思えない事件だった。

——そんなものだろうよ。

と、老人は思っていた。

——人とは、ある日、突然に狂うものだ。

老人はそう考えている。

その理由も、他人にはわからない。

ふいに狂ってしまった人間を、老人は、これまでに何人か見ている。

数十年前、老人は兵隊として大陸に渡ったことがある。そこで、骨を削るような辛い行軍を何度もやった。

その行軍の最中に、老人の横を歩いていた男が、いきなり笑い出したことがある。そのま
ま男は笑いやまなかった。

笑っている男に気づいた上官に殴られても男は笑うのをやめなかった。男の目は、遠くを
見ていた。

男は狂っていたのである。

その日の朝まで、老人と話をしていた男であった。何かの狂気が、人知れず少しずつ男の
内部で育ち、ある日突然おもてに姿を現わす。他人はむろんのこと、本人もそれに気がつか
ないことがある。

——人間のことはわからない。

どんな狂気をその内側に秘めているのか。

あの戦争も、巨大な狂気であったのだと今は思う。何故、人が人を殺せるのか。戦場で狂
ったあの男こそ、正常であったのではないか。正常であったからこそ狂ったのだ。

だとするなら、あの戦争で狂わなかった本物の狂人たちが造りあげたこの世の中が、狂っ
ていないわけではない。

あの時狂わなかった自分もまた狂っている。狂気を内に秘めたまま数十年を生き、こうし
て走っているのだ。

その狂気が、いつか自分の表皮を喰い破り、外に出てくると老人は思っている。
さもなければ、ゆっくりと狂っていくのだ。“じょぎんぐ”などというまいをしている自